子どもの想いの目線からの対応、工夫を

当 HP の「実習は、『give　and　take』関係だからこそ、大事！」を目にした、あるメル友から次のような情報をいただいた。

「自宅の住所を教えないように」と、同じような指導しているある学校の理由は、「過去に施設の子どもがどうしても実習生に会いたくなり、施設を抜け出して手紙の住所をもとに実習生の所へ行ったということがあったそうです。」とか。

施設側が管理上無断外出は困るので学校側に申し入れたり、学校側も施設に迷惑をかけては申し訳ないからと学生指導するのも、理解できないではないが、それは大人側の論理。

最も肝心な、無断外出は良くないと解っていながらも実習生に会いに行く、施設という集団生活であるが故に生じるその子どもの何とも切なくなる気持ちは、どうフォローされているのだろうか？

実習生に、「時々お手紙を書くし、また、時々会いに行くから、施設の先生（スタッフ）に黙って外出なんかしないで、先生のいうことをよく聞いて、いい子でいてね。」というような継続協力してもらう発想がなぜ出てこないのだろうか。

学生も、施設スタッフや学校と相談するところから、たくさんのことを学べると思う。

子どもは、好きな人（心の居場所を感じる信頼する母親のような存在の人）に嫌われないようにと、叱られることからも辛抱・我慢を覚え、いわゆる社会性が育って行くとも云える。

信頼を感じない人に叱られると、それは威圧と感じ萎縮するだけで、子どもの生きる力にはならないと思う。

施設も学校も、そうした子どもの想いの目線で、内容ある指導をして欲しいと思う。

子どもであろうが学生であろうが、人を育てるということは手間暇がかかり面倒さを伴うことを、施設も学校も念頭において欲しいものである。

施設ではどうしても集団生活になりがちだし、スタッフも個々の子どもの想いに対応し切れない側面が多い。

それだけに、自分は現職時代に、情緒不安定になりがちな子どもに専用ボランティアをお願いしたこともある。

こうした経験から、ケースによっては、実習生やボランティアに協力してもらってもいいように思う。

「心豊かな子どもに育てましょう！」とよく聞くが、まずは大人がその子どもの気持ち（行動）を受け止めようとしていることを、子どもに伝えるところから始まるのではないだろうか。

（2006 年 7 月 2 日　記）